

赤十字新聞

The Red Cross Journal Japanese Red Cross Society publication

■編集・発行／日本赤十字社 企画広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 TEL.03-3438-1311
一部20円 赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。

8 Aug 2010

Vol.843 <http://www.jrc.or.jp>



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

第46回献血運動推進全国大会

「献血運動の輪をすべての世代に」

名誉副総裁皇太子殿下がお言葉

「第46回献血運動推進全国大会」が7月15日、日本赤十字社名誉副総裁である皇太子殿下ご臨席のもと、島根県民会館（松江市）で開催されました。献血や血液事業に貢献した功労者の表彰のほか、体験発表などが行われ、血液事業の今後の発展を誓い合いました。

大会は、国民一人ひとりに献血の重要性を認識してもらうことを目的に、7月の「愛の血液助け合い運動月間」にあわせて毎年開催しているもの。日赤と厚生労働省、島根県が主催し、全国から1500人が参加しました。式典で皇太子殿下は、昨年度の献血者が一昨年度より約20万人増加し、約530万人だったことに触れ、「関係者

の皆さんの努力と、国民の一人ひとりの献血への理解と協力の成果」と感謝を述べられました。その上で、「大会を契機に、献血運動の輪が若者を始めとするすべての世代にますます広がり、献血への協力がいつそう強まっていくことを希望します」と国民に呼びかけました。

主催者あいさつをした日赤の近衛忠輝社長は、血漿分画製剤の自給率が100%に満

たず、輸入製品に頼っている現状を指摘。「血液製剤の国内自給は国の目標であり、国際的な流れからも極めて重要。国民運動である献血を皆で支えていくことの覚悟を持つていただかなければ」と訴えました。

体験発表 輸血が私にくれた 白血病と闘う力

松江市 松本真由さん



平成15年7月、職場の健康診断で血液に異常が見つかりました。病名は急性骨髄性白血病。24歳の時でした。数日ごとに繰り返される赤血球と血小板の輸血。白血病の治療を経験して、自分だけの力で「生きている」のではなく「生かされている」ことを知りました。だからこそ自分の命を大切にしようと思いい、病気と正面から向かい合うことができました。

輸血への感謝で 献血推進活動

出雲市 成相伸次郎さん



平成22年1月2日の夜、突然の下血で入院しました。しかし手術では出血箇所を見つけれず、薬剤での止血も効果がありません。医師からは死の宣告まで受けていました。再度の開腹手術で幸い出血箇所が見つかりましたが、こ

す。移植を受けた人間はもう献血できませんが、自分の経験から献血という善意の力の重要性を伝えること、それが私に血液をくださった方々への恩返しだと思っています。……の再手術までの約1週間、大量の輸血を受けました。血を分けていただいた方には、感謝の言葉が見つかりません。以前から入会していたライオンスクラブの献血活動への参加は、「少しでも恩返しを」との思いからです。

平成20年から21年には、島根・山口両県のライオンスクラブ保健福祉委員長として献血推進を行う機会を与えられました。今後も微力ながら献血推進に力を注ぎ決意です。その事が私を生かしていただいた多くの皆さまへのただ一つの感謝の行動でもあります。

昭和天皇記念血液 事業基金推進賞と 学術賞を授与

血液事業に貢献した個人・団体に贈られる「昭和天皇記念血液事業基金献金推進賞」は、全日本ロータス同友会（東京都）とフニー株式会社（同）が受賞しました。

血液事業に関する学術研究で功績のあった研究者らに贈られる同基金「学術賞」は、日本輸血学会会長などを歴任した湯浅晋治氏が受賞しました。

大雨災害への義援金募集

7月中旬に広島県や山口県などを襲った大雨で被災された方々への義援金にご協力を願います。

（金）まで
受付口座＝郵便振替口座
01270・4・800011
加入者名＝日本赤十字社山口県支部

①広島県支部での義援金受付
名称＝平成22年広島県大雨災害義援金
受付期間＝平成22年8月31日（火）まで
受付口座＝郵便振替口座
01200・8・800014
加入者名＝日本赤十字社広島県支部

②山口県支部での義援金受付
名称＝山口県平成22年7月大雨災害義援金
受付期間＝平成22年8月20日

※振替用紙の通信欄にそれぞれの名称を明記してください。受領証発行を希望される方は、通信欄に「受領証希望」と必ず明記願います。
※窓口での取り扱いの場合、振替手数料は免除されます。
※銀行口座でも義援金を受け付けております。詳しくは広島・山口両県支部のホームページをご覧ください。



親子DEレスキュー in 神奈川 水の事故から身を守るう ペットボトルで 浮いたよ！

子どもたちの水の事故が増える夏休み。日本赤十字社の各県支部では水上安全法を学ぶプログラムを毎年実施しています。

7月17、18日には神奈川県支部で日帰り体験プログラム「親子DEレスキュー」を開催しました。

会場となった横浜市の「海の公園」には2日間で92組184人の親子が集い、ペット

ボトルやランドセル、ビニール袋などを浮具に活用する方法や着衣状態での動作を楽しく学びました。

海や川に落ちる事故に遭ったときには、まずは体を浮かせるのが第一。服や靴も浮力があるので脱がずにい



指導員の説明に耳を傾ける子どもたち

「親子DEレスキュー」を開催しました。会場となった横浜市の「海の公園」には2日間で92組184人の親子が集い、ペットボトルやランドセル、ビニール袋などを浮具に活用する方法や着衣状態での動作を楽しく学びました。海や川に落ちる事故に遭ったときには、まずは体を浮かせるのが第一。服や靴も浮力があるので脱がずにい

子どもたちからは、「ペットボトルだけでうまく浮いたよ」「服が重くなって大変。波もあるし動きにくかった」などの感想が出されました。小学校3年生の男児と一緒に参加した母親（43歳）は「海や川でのいざというときに、こうすれば助かる」ということが経験できました」と話していました。

神奈川県支部事業部救護課の内田直人さんは、「水に落ちてしまったときには、慌てずに落ち着いて浮くことが大切です。また、水辺では小さなお子さんから保護者の方は絶対に目を離さないでほしい」と注意を呼びかけました。（関連記事を2、6面に掲載）



◆赤十字この一年

日赤では、毎年「赤十字この一年」というDVDを作成しています。その最新版を見ていて、この一年もずいぶん様々なことがあったと、改めて感慨を覚えました。

昨年は赤十字思想誕生150周年。その節目の年に、近衛日赤社長がアジア初の国際赤十字・赤新月社連盟会長に選出されたことは、赤十字史に残る出来事になるでしょう。

一方、今年の1月には、ハイチで死者22万人という甚大な被害をもたらした大地震が発生、さらにチリ、中国青海省と大災害が続きました。

日赤では、いち早くハイチに医療チームを派遣しましたが、同国は、日赤にとっても決して馴染みのある地域ではありませんでしたから、救援活動に多少の不安や戸惑いがないとはいえませんでした。

そんなとき、山梨県在住の医師・小澤幸子さんが、自ら医療チームへの参加を申し出てくださったのです。小澤さんは「ハイチ友の会」の代表で、昨年の11月にもハイチを

▼プロフィール

昭和22年生まれ、栃木県出身。元厚生労働事務次官。平成17年から日本赤十字社副社長。趣味は読書で、自身の読書遍歴をまとめた「遊歩入夢—文庫の香り」（弓立社）の著書がある。

訪れたばかり。同国のことを熟知している方でした。医療チームのメンバーが大いに勇気づけられただけでなく、現地での救援活動にたいへん大きな力となったことは言うまでもありません。

これは、日赤にとっても貴重な経験でした。そして私は、救援・救護活動の際に、赤十字の関係者だけでなく、その時々、幅広い方々の参加を得て展開するという形は、これからも有効な方法のひとつになるかも知れないと考えています。

長い歴史を編んできた赤十字ですが、世界も日本の社会も激しく変動しており、次々に新しい課題が生まれています。赤十字も、これらに柔軟に、弾力的に対応して、日々進歩を続けなければならないと痛感する一年でした。

この「ブログ」がスタートして丸一年。今回でひと休みとなりますが、今後も、ご意見やお気づきの点などがあれば、ぜひお寄せいただきたいと思います。

メール・アドレスは、otsukablog@jrc.or.jpです。



繰り返し放映された日赤CM

プロ野球「マツダオールスタ」の試合中、球場内外で赤十字のPRイベントを展開し、活動への理解と参加を呼びかけました。



女性ファンも心肺蘇生法を体験

福岡県、新潟県で発生した地震の際の災害救護活動を紹介したパネルや救護物資が展示されたほか、AED（自動体外式除細動器）の実演、移動採血車による献血も実施され、多くの来場者でにぎわいました。

常任理事会開催報告

平成22年7月16日、本社において平成22年度第4回の常任理事会が開催されました。審議結果は左記のとおりです。

付議事項

1 予算の補正について

（埼玉県赤十字血液センター）及び愛知県赤十字血液センターの整備計画にかかる血液事業特別会計歳入歳出継続費予算の補正

2 資金の借入について

（神戸赤十字病院の電子カルテシステムの更新整備及び徳島赤十字ひのみね総合療育

センターの増改築工事にかかる資金の借入）

3 理事会に付議する事項について

（ハイチ、チリ、中国青海省大地震災害救援金にかかる一般会計歳入歳出予算の補正、熊本赤十字病院の土地の取得にかかる医療施設特別会計歳入歳出予算の補正）審議の結果、予算の補正及び資金の借入については原案のとおり議決され、理事会に付議する事項については原案のとおり理事会に付議することについて了承されました。また、トルコ地震復興支援事業にかかる報道について報告しました。

また、試合前に献血を行った原嘉宏さんは、「遠方から来ました。昔の献血手帳が今はカードになり、どこでも簡単に献血ができて便利。今日は日赤の活動を知る良い機会になりました」と話していました。

球場内外でPRイベント

プロ野球との強い絆へステップ

赤十字看護大学・短期大学から平成23年度入学のご案内

日本で世界で活躍する

看護専門職・介護専門職になりたい学生を募集しています

赤十字の看護大学・大学院・短期大学では、赤十字の人道理念に基づく教育・研究を通じて看護・介護の知識・理論・技術等を修め、将来は国の内外で赤十字活動、保健・医療・福祉や看護の教育研究の分野で活躍する優れた専門職になりたい学生（平成23年度入学）を募集しています。

看護大学（看護学部：学士課程）

大学名	所在地	募集人数	奨学金・国家試験・就職先	* 願書受付・試験日程等は各大学で案内しています。
日本赤十字看護大学*	東京都渋谷区	130人	●日赤奨学金等の利用者は6大学全体で在学学生の44%（H21年度）	http://www.redcross.ac.jp/ TEL 03-3409-0875
日本赤十字北海道看護大学*	北海道北見市	100人	●看護師国家試験の合格率は6大学全体で98.2%。（H21年度）	http://www.rchokkaido-cn.ac.jp/ TEL 0157-66-3311
日本赤十字秋田看護大学	秋田県秋田市	100人	●6大学を卒業した学生のうち68%が日赤の病院等に就職（H21年度）	http://www.rcakita-jc.ac.jp/ TEL 018-829-4000
日本赤十字豊田看護大学	愛知県豊田市	120人		http://www.rctoyota.ac.jp/ TEL 0565-36-5111
日本赤十字広島看護大学*	広島県廿日市市	115人		http://www.jrchcn.ac.jp/ TEL 0829-20-2800
日本赤十字九州国際看護大学*	福岡県宗像市	100人		http://www.jrckicn.ac.jp/ TEL 0940-35-7001

（注）*印の大学では、認定看護師の教育課程も開設しています。（開設コース等の詳細はWebサイトをご覧ください。）

大学院（看護学研究科：修士課程・博士課程）

大学名	所在地	課程	募集人数	* 併設している専門看護師の教育課程の領域。
日本赤十字看護大学大学院	東京都渋谷区	博士	看護学専攻5人	—
		修士	看護学専攻30人、国際保健助産学専攻15人	がん・小児・慢性疾患・クリティカルケア・精神
日本赤十字北海道看護大学大学院	北海道北見市	修士	看護学専攻6人、助産学専攻10人	がん・感染症
日本赤十字豊田看護大学大学院	愛知県豊田市	修士	看護学専攻10人	母性・精神
日本赤十字広島看護大学大学院	広島県廿日市市	修士	看護学専攻10人	がん・小児・母性・精神・地域
日本赤十字九州国際看護大学大学院	福岡県宗像市	修士	看護学専攻10人	—

（注）願書受付・試験日程等の詳細は、上表の大学Webサイトをご覧ください。

短期大学（介護福祉学科）

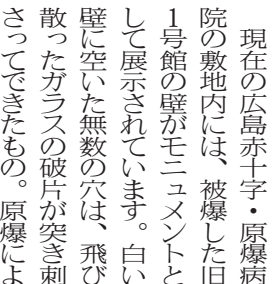
大学名	所在地	募集人数	就職	* 願書受付・試験日程等は大学で案内しています。
日本赤十字秋田短期大学	秋田県秋田市	50人	●卒業生のうち94%が介護関係の施設等に就職（H21年度）	http://www.rcakita-jc.ac.jp/ TEL 018-829-4000

被爆から65年 原爆病院過去から未来へ

赤十字は核兵器に どう向き合ったのか

世界で唯一、日本にしか存在しない病院があります。日本赤十字社の運営する原爆病院です。被爆者治療を目的に広島と長崎に設立されました。今年には被爆から65年。原爆病院が果たしてきた役割は何なのか。そしてこれから担っていくものは――。

人々を支えた赤十字の旗



阿部直美さん

現在の広島赤十字・原爆病院の敷地内には、被爆した旧1号館の壁がモニュメントとして展示されています。白い壁に空いた無数の穴は、飛び散ったガラスの破片が突き刺さってきたもの。原爆による破壊のすさまじさを今に伝えています。



広島赤十字病院は爆心地から1.5キロメートルの距離にあり、本館建物の外壁は残ったものの病室は破壊され、看護学生の宿舎も全壊。医師や看護師、看護学生など300人以上が死傷しました。そんな状況下で救護活動が始まりました。

直美さん(65歳)は、「建物に掲げられた赤十字の旗が被爆者の支えになったと先輩から教えられました。あそこに行けば助けを求めると、大勢の方がここを目指してきた。そうすれば助けを求めます。医師も看護師も不眠不休で活動が始まりました。」



不眠不休で行われた救護活動

遅すぎた専門病院設立

「原爆の子の像」のモデルとして知られる佐々木禎子さんが亡くなったのは昭和30年10月、2歳で被爆した時ばかりがなく、順調に成長していた禎子さんですが、昭和29年に急性白血病となり、翌年12歳の生涯を閉じました。この禎子さんが入院していた病院が広島赤十字病院です。当時はまだ原爆病院は造られていませんでした。



昭和20年8月6日、原爆が投下された直後からうして外壁が残った広島赤十字病院周辺の風景

終わらない被爆者治療



土肥博雄院長

「被爆者は高齢化し、その人数も減ってきています。でも、被爆者治療は終わっていません。土肥院長はこう語ります。被爆者ががんの関係については、被爆時年齢が若いほどがんの発症リスクが高く、その潜伏期間も長いことがこれまでの研究により明らかになっています。」



現在、広島赤十字・原爆病院は、白血病などがん治療の分野で日本有数の医療水準を誇っています。一方、600床余りのうち被爆者の入院は数分の1

歴史の証人として



「原爆の子の像」(写真:広島平和記念資料館提供)

名前は未来永劫残しておくべきだと思います。その理由について土肥院長は、「原爆投下は世界史の中で大きなエポック(事件)。その被爆者を治療した病院がここであるという事実を忘れてはならないからです」と強調します。

赤十字思想を 実践した ジュノー博士

GHQ動かし
被爆者救護に尽力

医薬品と
ともに広島へ



戦争、スペイン内戦、第2次世界大戦で赤十字国際委員会(IRC)の駐在員として自衛者救護、捕虜の処遇改善や交換、救護物資の手配、安否確認などの人道活動に奔走しました。長崎に原爆が投下された1945年8月9日、IRC駐日首席代表として東京に着任。目的は連合国軍捕虜の処遇改善でしたが、原爆による広島への影響を知った博士は終戦後、連合国軍司令部(GHQ)に緊急救援を要請します。

活動を支えた 赤十字思想

ジュノー博士の献身的な活動を支えたのは、「戦争で傷ついた人々を敵味方の区別なく救う」という赤十字の思想です。

完成

「ジュノー」が
「ジュノー」が

二度と原爆が使われない 平和な世界を

元日本赤十字社長崎原爆病院看護師
米倉百合子さん(85歳)



米倉百合子さん
(長崎原爆病院勤務当時)

佐世保海軍病院に勤務していた私が長崎に戻ったのは終戦翌日の8月16日。「実家のある看護婦は救護に行くように」と命ぜられたのです。2〜3人ずつに分かれて救護に回る途中、私は実家の様子を思い、父と母は真山に避難していて会えなかったのですが、父は右半身に火傷を負っていたことを後から知りました。巡回救護は、赤十字マークを着けていた私たちに大勢の被爆者の方が「看護婦さん、看護婦さん」と声をかけてきました。そんな方の中には、外傷が見えたらない人もいます。どうしていいのかわからず、何もしてあげることができませんでした。長崎原爆病院に勤務するようになったのは、昭和33年に病院ができた3年経った頃でした。患者さんのお話を聞くと、原爆がなければ、病院も破壊され、薬品や医療器具もなくなりました。医師、看護師も被爆するのですから、救護する人がいなくなってしまうのです。これも原爆の恐ろしい点だと思います。この被爆兵器がもう二度と使われない配れない、平和な世界が訪れるよういつも願っています。

奪われた命と今も続く苦しみ

各地から赤十字の救護班

核兵器廃絶と赤十字

原爆による死者は年内だけで広島が14万人、長崎で7万数千人と推計されています。さらに放射線による人体への影響は長期に及ぶ、がんや白血病、免疫機能の低下、白内障などへの影響が明らかになっています。被爆者の苦しみは今も終わっていません。広島では、隣県の赤十字病院からの救護班が7、8日は到着。長崎でも県内や自衛隊から派遣された日赤看護婦が不眠不休で救護にあたりました。

いのちを守る赤十字マーク

次のようなケースは、「赤十字マーク」を使用することができません。

- 例1 病院、診療所等 (赤十字病院を除く。)
- 例2 薬局等
- 例3 市販の救急箱、薬箱・瓶等

武力紛争が起きている地域で、負傷者の救護にあたる要員や施設を攻撃から守るのが「赤十字マーク(標章)」です。人のいのちと安全を守る役割をもっていることから、その使用法はジュネーブ条約や国内法で厳しく定められています。紛争時や戦争の際に救護員や病院を適切に保護するためのマークであることから、平時は赤十字社や自衛隊の衛生部隊など法律に基づいて認められている場合に限り、一般の病院などが使用することは禁止されています。赤十字マークが病院や薬局などの医療機関を示すマークとして誤って使われる例が多数あることから、日本赤十字社ではマークの理解促進を図る取り組みを継続的にを行っています。

こどもも大人もチャレンジ



福島県支部は6月20日、福島市内のプールで着衣泳の講習会を開きました。小学生から大人まで18人が参加し、ペットボトルなどを活用して仰向けに浮かぶ練習をしました。着衣のまま海や川に落水し

水の事故が増える夏休みを前に各地で水上安全法の講習会が開かれました。

水の事故から身を守ろう

た際にも、慌てず「浮いて」救助を待つことの大切さを学びました。

鹿児島県支部は7月3日、鹿児島市・磯海水浴場で第1回親子DEチャレンジ水辺のレスキューを開催しました。親子20組54人が参加し、水の事故に遭ったときに自分を守る方法や、事故防止などについて学びました。

大阪府支部も7月8日、堺市立黒山小学校で小学5、6年生（113人参加）を対象に着衣泳の講習会を開きました。

福岡県支部は、水上安全法の講習会を県下各地で実施しました。7月10、11日には津屋崎海岸（福津市）で、レスキューボードの使い方など実践的な救助法を講習。受講者は「海での救助は天候や波などの条件に左右されるのがわかった」と感想を寄せました。

福井県支部も7月3、4日に高浜町城山海水浴場で浜茶屋（海の家）のスタッフや消



浅瀬で溺者を搬送する方法の講習

海で学んだ実践的救助法

看護師が小学校で「保健」の授業 東

武蔵野赤十字病院（武蔵野市）は6月8日と15日、近隣の武蔵野市立境南小学校に看護師各3人を講師として派遣し、「保健」の授業を行いました。専門的な立場から授業をしてほしいという、同校からの要請を受けたものです。

8日は「健康な生活習慣を知ろう」をテーマにした6年生の授業。こどもたちは模型の血管に触れながら、「動脈硬化とはどんな病気か」など

看護師が小学校で「保健」の授業 東

ジャイアンツの球団マスコット・ジャビット君も赤十字PRに役



7月6、7日の両日、いわきクリンスタジアム（福島県いわき市）とひたちなか市民球場（茨城県ひたちなか市）で開催された対広島戦では、設置した特設ステージ—KINGで、それぞれの日赤職員が赤十字活動を紹介。「巨人軍の応援とあわせて日本赤十字社を応援してください」と呼びかけました。

ステージそばのテーブル



未来の夢はWカップ！

新潟県支部では、J1アルビレックス新潟選手会は6月30日、地域貢献活動として新潟市内の小学校4校を訪問。青少年赤十字（JR）加盟校の市立丸山小学校と東青山小学校では、選手がJ1リーガーになる夢を実現するまでの話を聞いたり、ミニゲームなどの交流が行われました。

参加したこどもたちからは「大人になったらJ1リーガーになりたい」との声が上がり、目を輝かせながら交流会を楽しんでいました。

新潟県支部では、J1アルビレックス新潟とのパートナーシップを組み、地域貢献活動を展開しています。



奉仕団から手づくり防災頭巾 宮

宮崎市家庭看護赤十字奉仕団（仁田脇千津子委員長、団員6人）は7月9日、災害時に役立てて欲しいと、手作りの防災頭巾を宮崎県支部に贈呈しました。

同奉仕団は昭和55年に家庭看護講習会の受講者で結成。救急法や災害時高齢者生活支援講習などへの参加を続けてきました。毎月の定例会では、救急法や幼児安全法など

航空機事故想定し 初の災害救護訓練 茨

茨城県支部は6月17、18日、航空機事故を想定した初めての災害救護訓練を小美玉市内の体育館で実施しました。今年3月の茨城空港の開港に伴うもので、水戸、古河両赤十字病院、赤十字奉仕団、消防本部などが参加しました。

訓練は、航空機が着陸に失敗し、多数の傷病者が出たとの想定。傷病者を事故現場から救護所に搬送し、トリアージ（治療の優先度判定）を行うなどの流れを確認しました。検証では「訓練でもスムーズな救護活動が難しい。実際はさらに困難が予想され、

スポーツとコラボ

遠征先でも赤十字PRイベント

2008年からスタートした読売巨人軍による「赤十字支援プロジェクト」。今年から遠征先の球場でもPRイベントが行われています。

Jリーガーが学校訪問 こどもたちと交流 新潟

新潟県支部は、J1アルビレックス新潟選手会が6月30日、地域貢献活動として新潟市内の小学校4校を訪問。青少年赤十字（JR）加盟校の市立丸山小学校と東青山小学校では、選手がJ1リーガーになる夢を実現するまでの話を聞いたり、ミニゲームなどの交流が行われました。

参加したこどもたちからは「大人になったらJ1リーガーになりたい」との声が上がり、目を輝かせながら交流会を楽しんでいました。

同PRイベントは7月27日に長野オリンピックスタジアムで開催された対中日戦でも実施。9月に富山と新潟で巨人軍が行う遠征試合でも予定されています。

継続的な訓練が必要」などの意見が出されました。

防災頭巾作りに参加した奉仕団員は「見本がなく、作るのに苦労しましたが、災害時に役立てていただければ嬉しいです」と話しています。

航空機事故想定し 初の災害救護訓練 茨

茨城県支部は6月17、18日、航空機事故を想定した初めての災害救護訓練を小美玉市内の体育館で実施しました。今年3月の茨城空港の開港に伴うもので、水戸、古河両赤十字病院、赤十字奉仕団、消防本部などが参加しました。

訓練は、航空機が着陸に失敗し、多数の傷病者が出たとの想定。傷病者を事故現場から救護所に搬送し、トリアージ（治療の優先度判定）を行うなどの流れを確認しました。検証では「訓練でもスムーズな救護活動が難しい。実際はさらに困難が予想され、



訓練の緊張感の本番さながら



がオープンしました。NPO法人「医療の質に関する研究会」（理事長・日野原重明聖路加国際病院名誉院長）から図書などの寄贈を受け開設したものです。

図書館の目的は「患者さん自身が病状や治療法について理解し納得して、医療に積極的に参加してもらう」こと。寄贈された医療関係図書671冊と、児童書や既存の図書を合わせて、蔵書数は約1000冊。2台のパソコンで医療情報検索やDVD視聴もできます。

中学生が職場体験で義肢を製作 千葉

文部科学省が推進する「キャリア教育」の一環として千葉県支部が受け入れている中学生の職場体験。6月21日に始まった今年度の職場体験には、千葉市立大宮中学校2年の吉澤那由太君と小畑実果子さんの2人が参加、3日間にあたり赤十字の仕事を経験しました。

初日、赤十字の歴史や事業

蔵書1000冊！ 患者図書館オープン 徳島

徳島赤十字病院に7月12日、患者図書館はなみずき



広々とした閲覧スペース



初めてみるエアテントにビックリ！

ERUの展開を間近で体験してもらおう企画です。

こどもたちは初めて見る機材に驚いた様子で、みるみる膨らむエアテントの大きさに歓声をあげていました。

dERU実演し小学生と交流 福岡

福岡県支部特別養護老人ホーム豊寿園は6月16日、北九州市立松ヶ江北小学校の児童との交流会で、dERU（移動式仮設診療所）の展開実演を行いました。

同校は豊寿園と同じ門司区内にあり、JRCに昨年加盟したことを機に交流が始まりました。今年度は4回の交流を予定しており、1回目の今回は赤十字を身近に感じてもらうと、d

装いも新たに 健康増進 セミナー

北海道

北海道支部は6月24日、新しい企画として「健康増進セミナー」を開催しました。この企画は、昨年度からスタートした健康生活支援講習の普及を目的に、同講習の一部を2時間単位で受講できるように



車椅子への移乗介助を実体験

「いのちいっぱい自分の好きなことをやってきて、気がついたら88歳！ 最近は一〇〇歳まで生きたらどうしようって心配してるんです（笑）」

作家であり、比叡山延暦寺禅光坊の住職を務める瀬戸内寂聴さん。日本赤十字看護大学が7月2日に開催した公開講座で講演し、生きることの意味について熱く語りました。

第2次大戦の敗戦を北京で迎えた23歳の時。「正しい戦争」と教えられ、鵜呑みにしてきたすべてがひっくり返ったことで、「人の言う通りに動くのではなく、自分の感じたことを大切に、やりたいことに精一杯挑戦しよう」と決心したそうです。その思いは今も続いています。平成18年、初のオペラ作品『愛怨』の台本を執筆。この作

心からの寄付に感謝

バザー収益金を
世界のこども
たちへ

石川

赤十字奉仕団のチャリティバザー実行委員会から7月9日、バザーの収益金88万1835円が石川県支部に寄託されました。

「世界のこどもを救おう」がテーマのバザーは、5月の赤十字運動月間に県内で開催

される「赤十字のつどい」で毎年実施されています。

「多くの命救
つて」と献血
運搬車を寄贈

広島

広島市内で紙店を経営する永井健二さんから献血運搬車が寄贈され、7月9日に広島県赤十字血液センターで贈呈式が行われました。

5年前に患った病気をきつ

工夫したものです。セミナーには、赤十字奉仕団員ら12人が参加し、要介護高齢者の寝返りの動作、リラクゼーションなどを体験しました。参加者からは 具体的な

な内容で、介護に生かせるなどの感想が出されました。

かけに、医療活動に貢献したいとの気持ちが強まったという永井さん。「多くの命を救ってください」と車の目録と鍵を血液センターの沖田肇所長に手渡しました。



運搬車の前で永井さん(左)と沖田所長

三洋電機から
中国青海省地震
への救援金

大阪

三洋電機従業員の有志の皆さんから、中国青海省地震被害の救援金として133万2



三洋電機従業員の有志一同代表者(左2人)

939円が大阪府支部に寄せられました。有志代表からは「国境を超えて助け合う大切さを日赤の活動から学んでいます。今後も社員一同、温かい支援に努めたいと思っています」とのメッセージをいただきました。

生徒の思いを阪
世界に届けて大

JRC加盟校の守口市立大



作家・尼僧
瀬戸内寂聴さん

品は今年ドイツでも公演されました。一昨年にはケータイ小説のジャンルに進出し、話題になりました。「私の一番の作品は『夏の終わり』(昭和38年)」。これを超える作品を書いていきたい」とやりたいことの種は尽きません。そんな瀬戸内さんのパワーの

生きることは愛すること

ところが、イラクでは頼る人がおらず右往左往。その時、駆け込んだのが赤十字の施設だったそうです。「アドバイスをいただき、助けていただきました」と当時を振り返ります。「どの国の人だって、一人ひとりは普通の人たち。個人として付き合ひ、こちらが好意を持ってば、相手だって好意を持ってくれます。そうすれば戦争なんて起きません。赤十字は国を超えて、人類の立場で活動する組織。その点が立派だと思っています」

講演では、伝教大師最澄の「忘己利他」という言葉を紹介。「いいことは他人に与えて、苦しいことは自分という教えます。皆さんも人を愛し、人を幸せにする生き方」と呼びかけました。

Voice&プレゼント

◆「一日一善」をモットーに
——松田房子さん(葛城市)
7月号の「クロースアップ人」小松拓也さんの「今の自分を超越する気持ちを忘れない」が印象に残りました。モットーにしている「一日一善」を継続していきたいです。

◆「We are シンセキ」で献血
——匿名希望(男鹿市)
秋田県内の大学4年生です。「LOVE in Action」をきっかけに定期的な献血を始めました。これからも「We are シンセキ」の合言葉のもと、献血に行こうと思います。

プレゼント応募方法

「赤十字新聞」や赤十字活動へのご意見や感想などを下記までお寄せください。毎月抽選で素敵な赤十字グッズをプレゼントします。

☆今月号のプレゼント
赤十字ベアー「CroKuma
(クロクマ)」を3名様に



約26cm・化粧箱付
提供：(株)日赤サービス

●郵送/〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社企画広報室 赤十字新聞係
●fax/03-3437-7091
●メール/koho@jrc.or.jp
(件名「赤十字新聞8月号プレゼント応募」)
★ご投稿の際は、お名前、連絡先(住所・電話番号)を明記してください。匿名希望の際はその旨もご記入ください。当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。

赤十字事業資
金に個人から
高額の寄付
福井

9月の行事予定

開催日	行事名	開催場所	問い合わせ先
9/1 (水)	プロ野球公式戦 巨人 VS ヤクルト (巨人軍赤十字イベント)	富山市民球場	日赤富山県支部 ☎076-441-4885
9/10 (金)	プロ野球公式戦 巨人 VS 広島 (巨人軍赤十字イベント)	HARD OFF ECO スタジアム新潟	日赤新潟県支部 ☎025-231-3121



添えられた手の数は思いの強さを象徴

久保中学校の生徒会から7月2日、3万3081円が大阪府支部に事業資金として贈られました。募金は10人ほどの生徒会員が4日間にわたり校門前で呼びかけたもの。生徒会代表者は「一人ひとりの気持ちがたまっています。この気持ちが世界に届いてほしい」と思いを話しています。



橋本地区長に寄付金を贈呈する北出さん(右)

本の紹介
『「赤十字」とは何か』
小池政行著

世界最大の人道支援機関といわれる赤十字。本書は、その運動の原点である紛争時の人道支援活動にスポットをあて、複雑化する国際関係の中で赤十字がその役割を果たしていくための課題と展望を語っています。著者は、外務省を経て日本赤十字社国際部に勤務。現在日本赤十字看護大学教

授として国際人道法の教鞭を執る小池政行氏です。世界各地での人道支援を具体例に、「残酷な殺りくを行う勢力に対しての中立はありうるのか」「支援団体を標的とする勢力の存在」など人道支援が直面する困難を紹介。また、軍勢力と一体化した国際貢献が人道支援足りうるのかについても問題提起をしています。こうした考察に立つて著者は「人々の信頼を得る」と、人道法の「基礎教育」普及が人道支援に果たす重要性を指摘。また、支援に際しては「他者への共感、他国への共感、世界への共感(略)こそが、一人ひとりが何をこの世界にすべきなのかという、最初の一步となる」と力説しています。(藤原書店、2500円+税)



インタビュー INTERVIEW

戦場で人を救うということ



看護師
高原 美貴さん
(姫路赤十字病院・
看護師長)



パキスタン ペシャワール 戦傷外科病院に半年

「日本でも紛争地でも、いのちを救うという看護の仕事に何ら変わりはありません」——こう語る高原美貴さんは戦時救護活動のエキスパート。赤十字国際委員会（ICRC）が世界各地の紛争地に設置した病院での任務を何度も経験してきました。昨年12月からは、パキスタン北西部のペシャワールに設立されたICRCの戦傷外科病院に派遣され、先ごろ半年間の任務を終えて帰国したばかりです。

目立つ爆弾による負傷者

「病院に担ぎ込まれてくる負傷者の傷口は他の紛争地と比べても、ひどいものが多かったですね」

アフガニスタンとの国境地帯に位置するペシャワールでは、パキスタン政府軍とタリバンなど武装勢力との戦闘が2008年8月ごろから激化。多くの市民が自爆テロなどの被害に遭っています。

「アフリカの内戦では銃撃による負傷が多かったのですが、ここでは爆発物です。しかも手製で粗雑な爆弾が多い。傷口がどう汚染されているかわからないし、消毒も十分にできないので、戦傷外科ではこうした場合、手当をしてもすぐには縫合しないんです」



©ICRC/Jeroen Oerlemans
テントの病院内にも手術室、レントゲン、ICUなどの設備が整っている

負傷後の初期手当がよい加減で、治療が困難になるケースも。「別の病院でお腹の手術をしてもらった」と患者が訴えるものの、どんな治療をしたのかが分からないまま容態が悪化し、再度開腹手術を行ったこともありました。「ずさんな初期手当の結果、神経や血管がズタズタになってしまい、手や足を切断せざるを得なくなった患者も大勢います」

負傷者は敵味方の区別をせず

戦闘に用いられる武器・兵器によってこうした凄惨な傷を負う患者は、戦いの巻き添えになった市民だけではありません。最前線で戦っている兵士たちも、負傷すれば一人の患者としてICRCの病院を頼ってやってきます。

「傷ついた兵士は一人の人間、というのが赤十字の精神。ジュネーブ条約にもうたわれています。政府側であろうと反政府側であろうと負傷した兵士の治療は当然のことです」

しかし、完治した兵士が再び戦いに戻る可能性は十分にあり得ること。高原さんがケニアで活動中に看護した男性は退院する際、「これでまた戦えるよ」とあいさつし、戦いに戻っていったそうです。

「その時は、さすがに『それはもうやめてよ』と思いました。けれども、傷ついた人のいのちを救うのが赤十字です。日本でも、あるグループに所属する患者さんは治療しない、というような患者を区別する病院がない



のと同じことです。相手が誰であれ、一人の患者として看護を行うのが私たちの使命です」。現実として、傷が癒えた後の個人の選択については赤十字といえども踏み込むことはできません。

「看護に誇り」の意識を広げたい

ペシャワール戦傷外科病院での高原さんの仕事は患者治療だけではありません。パキスタン人の医療スタッフらにICRCの戦傷外科治療手順を教えるのも大切な任務でした。

戦傷外科は、最小限の医薬品や機材で最大の効果を上げる工夫が成されています。それが故に、最新の医療を学んできたパキスタンの医療スタッフに「原始的」と受け取られてしまい、指導が困難だったと高原さんは振り返ります。一方、看護師と医師との上下関係が厳しく、医師の指示がないと動かない看護師が多いのも、高原さんの気になる点でした。

「患者の一番近くで、人間として患者を診るのが看護師の仕事。医師とは異なる役割があるんです。ですから、私は現地の看護師に『看護の仕事に誇りを持って』といつも訴えていました。私たちの活動が、看護に対するこうした認識を広げる貢献になればうれしいですね」

キルギス

民族衝突の被災者を支援

中央アジアのキルギス共和国※で6月に起きた民族衝突の被災者に対し、赤十字国際委員会（ICRC）と国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）は事件発生直後から救援活動を行ってきました。日本赤十字社はこの活動に総額20万4920スイスフラン（約1640万円）を支援しました。

同国南部でのキルギス系住民とウズベク系住民との衝突は、銃撃戦や住宅・商店などへの放火にまで発展。キルギス暫定政府の発表では死者約300人、負傷者約2000人に上ります。「計り知れない危機的な状況」（ICRC）のなかで、ウズベク系住民約30万人が家を離れ、約10万人が隣国ウズベキスタンに避難しました。

ICRCは、どの国際支援機関よりもいち早くキルギス国内の病院で負傷者治療への支援に取り組む一方、キルギスタン赤新月社とともに医薬品や医療機材を手配。避難住民に飲料水や食料、台所セット、衛生セットなどを配布しました。離れ離れになった家族の安否調査も行っています。ヤコブ・ケレンベルガー ICRC総裁は6月末、キルギスを訪問してオツンバエフ暫定大統領と面会、自らも救援物資配布に参加しました。総裁は「状況は沈静化しましたが、まだ支援を必要とする人がたくさんいます」と語ります。住民は帰還したものの、家が壊され安心して住める地域社会が崩壊するなど、キルギスには深い傷が残っています。ICRCは食料や衛生用品、乳児用品などの配布を続け、住民の生活再建支援も検討する意向です。

IFRCはウズベキスタンに入った難民を対象にした支援を実施。ウズベキスタン赤新月社が行っている難民キャンプ設営や、生活用品・衛生用品・保健医療の提供などを手配しました。事態沈静化とともに難民がキルギス国内に帰還しているため、ウズベキスタンに運ばれた物資は今後、キルギスに輸送され活用されます。

日本赤十字社では被災者救援活動に役立てるため、6月21日から7月30日の間、救援金を募集し117万7398円（7月26日現在）が寄せられました。ご協力ありがとうございました。

※キルギス共和国…日本の約半分の面積に550万人が住む国で、ソ連崩壊後に独立。キルギス人が約70%、ウズベク人が15%など多民族で構成され、たびたび民族衝突が発生しています。今回の衝突はキルギス系とウズベク系の若者間での衝突が発端とされています。



▲負傷したお年寄りを運び出す住民とICRCのスタッフ



▲南部オシに住む家族。民族衝突で自宅が破壊された



▲支援された食料の配布順を指示する女性リーダー



▲ICRCの支援で設置された給水ポイント



▲完全に破壊された学校で立ち尽くす教師。焼け残った学用品などを探している